

## 創業の壺



当社創業の頃、硝化綿製造時に使用した壺である。

「ひとつかみの脱脂綿を壺の中で硝化綿に変身させる努力の中から当社が生まれた。強酸の悪臭に耐えて、この壺と取り組んだ先人たちの汗と祈りを思い、われわれに継承し、発展させてゆかねばならない。

この壺を社宝と定め、今後大切に保管し、当社従業員が折りにふれて創業の心にたち帰るより所とする」

社長 (太平化学製品株式会社)

創業の壺が2005(平成17)年、セルロイドハウス横浜館に移設されました。

横浜館では、歴史的にみて大変重要な壺である、と判断しましたので地震などの振動対策として壺の下に白い台の

### 「HERZ

空気ばね式防振動台」

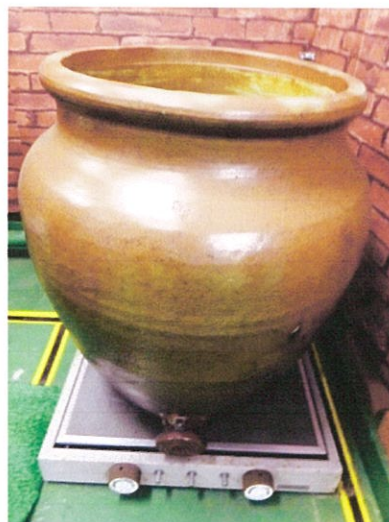
を備えました。左右の丸い掴みの調節弁の間に3本の電気コードの繋ぎ口があります。

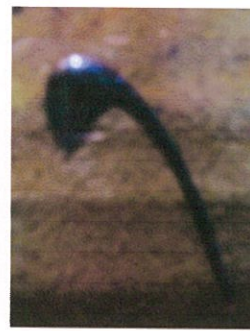
壺の容量は100ℓ

- 1、入口厚み3cm、口径46cm、
- 2、最大径60cm、
- 3、底辺が30cm、
- 4、高さ120cm
- 5、註出口7cm

壺の表面に刻印があります。これを拡大しますと、写真のように

『高山耕山製◇TK◇大日本京都』とあります。





壺の裏側に紫色でゴルフクラブのような形のものが、浮き出ています。高山耕山化学陶器社のロゴ・マークのようです。

田島紋吉は 1875 (明治 5) 年、群馬県高崎市生まれ。東京大学で薬学を学び東大病院の薬剤部勤務ののち神田駿河台の杏雲堂病院の薬剤師に転職しました。

杏雲堂から岸一太医師が医学研究のためドイツに留学しました。そのころヨーロッパでは、細く美しい絹の模造品が作られていました。それは硝化綿 (ニトロセルロース) を溶かし、細い穴から押し出してつくられた人造絹糸でした。

岸医師はそれに着目し、1906 (明治 39) 年、帰国すると同郷・高崎出身の田島紋吉とその工業化について研究を行いました。しかし硝化綿からつくられた人絹は、美しいが燃え易いという欠点があって世界的にも実用化されず、この計画は失敗に終わりました。

当時の日本では、イギリスのスコット・アーチャーが発明したコロジオン湿板法という写真術が流行っていました。

コロジオン液を塗ったガラス板をカメラに取り付けて、シャッターを切るとガラス板のコロジオンに映像が残るものです。コロジオンは硝化綿の硝化度の低い液体です。



(写真は横浜館に展示中の品です)

このころ東京では、瓶詰めの写真用コロジオン溶液を、写真問屋の小西商店や六桜社が輸入して販売していました。

そこに目をつけた田島紋吉は硝化綿の研究体験を生かしてコロジオン製造のため、1908 (明治 41) 年、東京府北豊島郡日暮里金杉村 (現在の荒川区西日暮里



2丁目と3丁目の間辺) に工場を建て、製造容器として高山耕山化学陶器社製の壺を備えました。

そして先ず、故郷の高崎から5歳年下の実弟・田島丑太郎を呼びよせました。二人は共にコロジオンの開発にとりかかったのですが、失敗の連続でした。苦心の末、漸く写真用コロジオン液を日本橋の写真問屋に納入できました。

次に考えたのが流動絆創膏でした。傷口に塗るとコロジオンの膜が出来て傷口をふさぎ流血が止る。薬剤師・紋吉ならでのアイデアでした。この製品は100年後の現在も「エキバン」として市販されています。



\*「1868年、アメリカの印刷工ジョン・ウイスレイ・ハイアットは、常備薬のコロジオン液がこぼれて硬くなっていることにヒントを得て、セルロイドを発明しました」\*

1916 (大正5)年、田島工業所は日暮里から尾久町山谷に移転し「田島硝化繊維工業所」の表札を掲げました。

1930 (昭和5年) 尾久町から埼玉県川口市に移転。京都・松風(しょうふう)工業の大きな陶器製の壺が据え付けられました。が、その壺は爆発事故で亡くなった5名とともに壊れてしまいます。

1938 (昭和13)年、田島は個人営業から田島化工株式会社となり、のちに太平洋化学製品株式会社となって今日に到っております。

次の写真は、セルロイドハウス横浜館の「創業の壺の関連展示品」です。



- ①創業の壺と苦楽を伴にした田島丑太郎の遺影と紋付き袴
- ②田島工業所と田島硝化繊維工業所の表札
- ③コロジオンの原料や製品を計量した秤
- ④田島化工の社旗

(了)